

あおもりの山を元気にしよう



林業女子会@青森

わにもつこで木工体験 ペンダントとブローチ

撮影してきた写真をパソコンに取り込み、画面にアップした。林業女子会@青森の会員の若い女性たちが笑顔で並んでいる。ワークショップで手作りしたペンダントとブローチを身に着け、満悦の笑みが浮かんだところを撮った記念写真である。

2019年9月28日、午後1時。大鰐町早瀬野にある「わにもつこ」に林業女子会@青森の会員たちが集まった。今回のワークショップはペンダントとブローチ作り。工房内のテーブルには材料の「板」が準備されていた。厚めの板と、薄い板がある。厚いほうは4・5cm四方のサイズで3mm厚。長方形の薄いほうは5cm×3cmの0・8mm厚で、イタヤカエデ、青森ヒバ、オオヤマザクラ、ミズナラ、ホオの5種類。これらを組み



テーブルの上に準備された5種類の材料の「板」。それぞれ違う木目や色を組み合わせる

合わせて作るのだ。

参加した6人を前に、「わにもっこ」代表の山内将才さんが、家具職人として31年になるという職歴を自己紹介したうえで、ペンダントとブローチ作りの手順を説明した。

「スギ板を土台にして、その上に、それぞれ自由な形にカットした薄板を接着剤で貼り付けます。サンドペーパーで角や表面を滑らかにしたら、ドリルで空けた穴に紐を通せばペンダント、安全ピンを取り付ければブローチになります。最後に火を通したサラダオイルを塗って光沢を出しますが、それはご自宅に帰ってから仕上げてください」

山内さんが制作したという「見本」がテーブルに置かれた。青森ヒバで、面取りをした丸みある表面が市松模様を描いている。薄板の合わせ目に寸分の隙もなく、手触りも

木とは思えぬ、磨いた石みたいになる。3人ずつ2つのテーブルに分かれて製作開始。土台のスギ板に、どの樹種の薄板をどうカットして、どう貼り付けるか。それぞれ色も木目も違う5種類の薄板をどう組み合わせ、どんな模様にするか――。

やつと決まったらしく、薄板に定規をあてがってカッターを持つ。一人は短冊みたいに細



山内さんが制作した職人技が光る出来栄の作品



作品作りに取り組む女子会の会員たち



薄板をカッターで慎重に切っていく

く、一人は斜めに、一人は半円
みたいに円く、それぞれ切って
いく。「一発で切ろうとしない
で、刃先で軽くキズをつけてか
ら、その上をなぞるようにし
て力を入れれば正確に切れま
すよ」と山内さんがアドバイ
スする。

作業中の林業女子@青森の
兼田孝子さん（県林政課職
員）に、手短かに伺ったところ
によると——女子会の結成は2

017年8月。女性ならではの
の視点を生かした活動で林業
を盛り上げようと10人でスター
トした。木の葉っぱのしおり
や、世界中の木を集めて木材
カルタを作ったり、林業を発
信するイベントではキノコ汁
をふるまったり、また、伐採し
た丸太を昔ながらに専用の道
具を使って雪の上を運ぶ力仕
事にも挑戦したという。

「林業女子会」は2010年に

京都で誕生した。徐々に全国
に広がり、「青森」は22番目とな
る。イベントで知って入会した
人もいれば、その人の職場の
同僚や友だちが加入するなど
して増え現在は31人に。

「それぞれ立場や住まいの異な
る女性たちが、森林や林業を
キーワードに、緩く繋がりな
がら活動しています」と兼田
さんが顔を上げて微笑んだ。

活動通じて交流広がる 「元気もらっています」

カッターを握りしめたま
ま、うーん、と女性が難儀して
いる。力を入れた刃先が動か
ないようだ。「それはイタヤカ
エデですね。堅いんですよ。ミ
ズナラも同じくらいに堅いで
す。軽くキズをつけてから引く
とうまくいきますよ」と山内
さん。「あ、ほんとだ」。切っ

ては薄板を接着剤でスギ板に
貼り付けていく。貼り終えた
表面にサンドペーパーをかけ



サンドペーパーで仕上げをかけた作品

る、のではなく、逆に作品のほ
うを持ってサンドペーパーに
こすり付けるほうがやりやす
い、とアドバイス。ドリルで空
けた穴に紐を通して首にかけ
る。笑顔になった女性が、こう
話す。

「木工体験をしてみたいと思っ
ても、どこに行けばいいのかわ
からないし、1人だとペンダン
トとかブローチとかを作って
みたいっていう発想すら浮か
びません。それで会に入ったん
です。いろいろ体験させてくれ



山内さんの実演を真剣な表情で見つめる



2時間かけて完成したペンダントとブローチ

るし、山内さんのような職人の方とも触れ合えるから良かったです。林業を元気にしたいというより、却って自分が元気をもらっていますよ」

活動を発信するフリーペーパーが『Rinjōy』(B5版、7ページ、年1回発行)。2019年3月付の創刊号に紹介されている「津軽の山のならわし」の「知ってる? 山の神の日」に、こうある。——『明治

35年に起きた八甲田雪中行軍遭難事件が旧暦の12月12日に当たる。実はこの日は、北海道や東北地方では「山の神の日」として林業や山仕事に携わる人達の間で認知され、山での仕事は休む習慣が残っている。言い伝えによると、山の神が木の数をかぞえるために山に入ることを禁止されており、山に入ると木の下敷きになつて命を落とすといわれている。



山内さんが紹介する世界のさまざまな木のオモチャについて認識を深める



女子会の活動を発信している『Rinjoy』

実際にその日は天気が荒れることが多く、まさに雪中行軍の日もそうだった。遭難事件は有名だが、「山の日」であつたとは読んで初めて知る人も多いのではないかな。

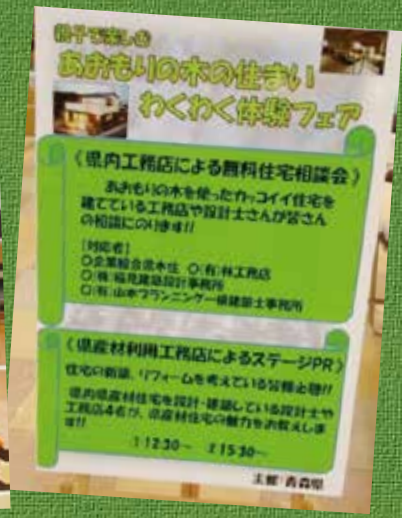
作品が出来上がるまで2時間。夢中になると時間は早い。オリジナル作品を持ち寄ってお互いに、「かわいい〜」。

記念撮影の後、山内さんが世界のさまざまな木のオモチャを紹介した。頭部が胴体から離れるようになってい

キツツキ。頭部をさかさまにして置くと変わる表情がまた、「かわいい〜」。一方、斧も割れるほど堅いことからオノオレカンバと名付けられたという秋田の木で作った什器のママヘラ(杓文字)や、照明器具としても需要が伸びている津軽のブナコなどについても紹介。参加者は木工体験だけでなく木についても学んだ。

この模様は『Rinjoy』2号(2019年度内に発行予定)に掲載される。

親子で楽しむ あおもりの 木の住まい わくわく体験フェア



青森の木に親しむフェア バスツアーも林政課主催

『親子で楽しむあおもりの木の住まいわくわく体験フェア』が2019年6月8日、おいらせ町のイオンモール下田で開かれた。主催は、青森県農林水産部林政課。2019年度第1回県産材触れ合いイベントとして5月25日にサンロード青森(青森市)で開催したその第2弾で、林政課が主催したところに、攻めの林業の姿勢が打ち出された。

開催趣旨は、県産材の利用拡大を目的として一般市民に県産材及び県産材住宅の魅力発信を行う。家を建てる計画のあるなしに関わらず、大勢の人が集まる場所で、あおもりの木を発信しよう、と、林政課林産振興グループの職員がパンフレットを手渡した。

新築やリフォームの計画があるにしても、直接工務店を



訪ねるのはなかなかに勇気のことだ。そこでまずはインターネットで工務店のホームページを見ることから始める。掲載されている写真の中から好みの外観や内観が目に残る。その工務店に展示場があれば訪ねてみる。完成見学会に足を運ぶ。——それが一般的だ。

訪ねて行かなくても、例えば普段よく行く大型スーパーのホールの一角に、住宅に関する相談コーナーなどが設け



多くの家族連れで賑わったフェア会場

られていけば、気構えることなく立ち寄れる。——そんなニーズに応えたのが林政課主催の「わくわく体験フェア」だ。「あのときフェアに寄ったのがきっかけで家を建てることになった」という「縁」に結び付くこともある。要は、種を蒔かなければ実らないのだ。

会場の「相談コーナー」では、あおもりの木を使った家にはどんな特長があるのか、耐久性・耐震性や、無垢材を使った家の省エネ性などについて

設計事務所や工務店の担当者が応えていた。

子供たちがすぐに見つけて駆け寄るのは工作や積み木のコーナー。その周りを親たちが囲む。「木」には子供だけでなく人を引き寄せる力がある。その「木」が、地元の木と、

海外から輸入している木とではどう違うのか。地元の木を住宅に使うメリットは何か。

体験フェアに寄ったことで関心を抱くようになってほしい。それが趣旨だ。

また、県林政課では、7月20日に「2019年度県産材住

宅触れ合いバスツアー」も開催した。「津軽コース」と「県南コース」に分かれ、参加者は製材所や森林組合、県産材を使って建てた住宅を見学して回った。

林業従事者が山で立木を伐採する。倒された原木はトラックで製材所に運ばれる。製材所で乾燥させた木材が柱や梁などの住宅部材に加工される。それらの木で、この地域に暮らす人たちの家を、地域の工務店が建てる——その地域循環によって地域経済は活性化し、林業復興につながる。林

政課が主催した「攻めの林業」のイベントはそこを狙いだ。

「攻めのイベント」大歓迎

地元工務店のある経営者はこう感想を寄せている。



太い角材に触れて年輪を数えてみる

「お客様って、家を建てる計画があつたにしても、それは話さないものです。話せば営業マンに付きまとわれると警戒するからです。それはお客様に共通した心理でしょう。そういう点で、われわれ工務店が相談会や見学会を行うよりも、県が主催してくれたほうがお客様はずっと参加しやすいはず。それと、バスツアーには県産材に関心のある方々が参加されるのですから、対応するわれわれとしても初めから県産材に的を絞った説明ができるわけです。無垢材の柔らかさとか吸湿性、保温性とか。それは双方にとって良いわけ。林政課が積極的にこのような「攻めのイベント」を行ってくれるのは大歓迎です」



県産材を使って建てた住宅を見学するバスツアーの参加者たち

「青森県の森林とは？ 森林・農業の課題と 林業研究所の目指すもの！」 木村公樹氏講演



青森県は、「奇跡の県だ」。これほど本県を称賛した表現を、その講演会で初めて聞いた。

講演会は、『NPO法人あおもりの木で地域を支える「伝統と技術」の

会』（大山重則会長）が2019年4月27日に八戸パークホテル（八戸市）で開いたもので、地方独立行政法人青森県産業技術センター林業研究所の木村公樹所長が、「青森県の森林とは？ 森林・林業の課題と林業研究所の目指すもの」をテーマに講演した。その中に「奇跡の県」が登場した。

木村氏の講演 青森県は「奇跡の県」だと言われています。一つの県で樹種のバリエーションが豊富で健全な森林が保たれている県は他に見られないことで、森林関係の研究者の中には、これは「奇跡」に値すると評価する人がいます。

この「奇跡」の話には実は順序がありまして、最初は「地球は『奇跡の星』」、次が「日本は『奇跡の国』」、その次が「青森県は『奇跡の県』」となるのです。

順序立てて話しますと—— 惑星の中で、生物が発見されたのは地球だけです。水があるのも、動植物が育っているのも地球しかありません。それで、地球は「奇跡の星」だと言われま

奇跡の星の奇跡の国の奇跡の県 青森県は樹種が突出して豊富だ

す。その地球の中で、日本と同じ緯度に位置する地域のほとんどが砂漠地帯です。なのに、日本は緑が豊富で自然が豊かです。これには偏西風が大きく影響しています。西から東へ向かって偏西風が吹くところに、地球上でも最も標高が高いエベレストなどの高山が連なるヒマラヤ山脈がある。そこにジェット気流に乗った風がぶつかって、南への暖かい風と、北への冷たい

風とに分れます。日本海の水分を含んだ暖かい風と冷たい風が日本の上空でぶつかり、日本にたくさん雨を降らせませす。

日本の紅葉は世界一綺麗だと言われます。赤、黄色、それに常緑樹の緑色が交じって実に色彩豊かです。これは樹種が豊富だからです。なぜ日本はこんなにも樹種が豊かなのかといいますと、太古の昔の水河期時

代、地球は氷に閉ざされたけど、日本は水から免れた。なぜか。海に囲まれた島国ということ、地形が急峻かつ複雑であったということ、そういう自然条件の恵みによって、日本では動物が絶滅しなかった。それで植物が絶滅しなかった。それで動物も植物も種類が豊富なのです。

その「奇跡の国」の日本の中でも、特に青森県は樹種の豊富さや、シカ被害や松くい虫被害

などが少なく健全な森林が保たれていることにおいて「奇跡の県」だと国内の研究者から評価されています。津軽・下北半島はヒバ、八甲田山や世界遺産の白神はブナ、スギも潤沢に育っているし、三八上北地方は南部アカマツの名産地です。ミズナラやコナラなど多様な広葉樹も分布しているし、日本海や太平洋沿岸部には健全なクロマツも生育しています。

では、なぜ青森県の森林がこんなにもバラエティーに富んでいるのかといいますと、地形がすぐく豊かだからなのです。三方が海に囲まれ、半島があつて、八甲田山がある。——このような複雑な地形がバラエティーに富んだ気候を育み、森林もバラエティーに富んでいるのです。

「奇跡の星」の「奇跡の国」の「奇跡の県」。そういう豊かな地域に住んでいるのだという自覚と誇りを、県民の皆様と共有したいものです。